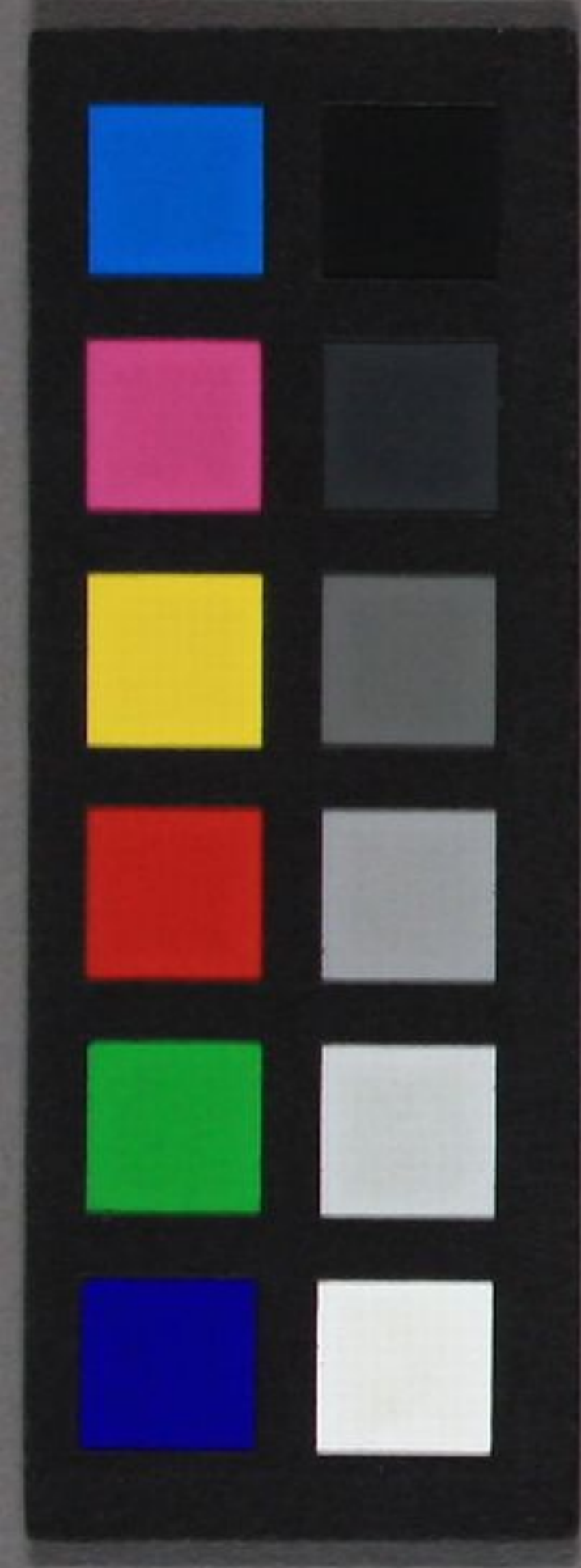
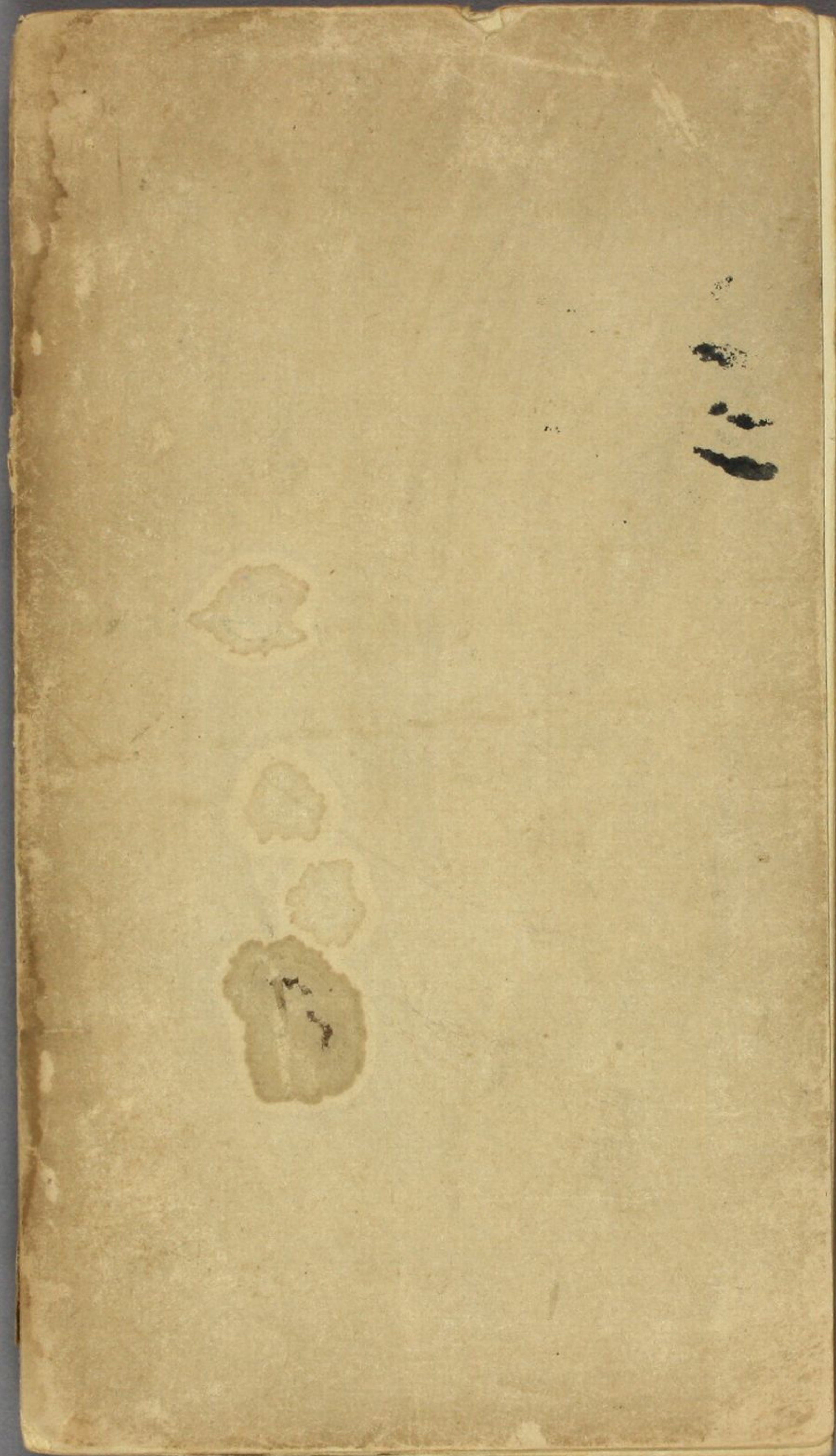


アムールスキー詩集







アムールスキ詩集

1302

ア
ム
ー
ル
ス
キ
ー
詩
集

序

友人マトウエーエフ氏勤勉力行の人、常に労働者に同情し、平和を唱道す。又頗る我邦の文物を好愛し、屢渡來漫遊して能く日本趣味を解し、我邦人の浦潮斯徳に在留する者の爲めに利便を與ふる事尠からず。現に同市市會議長にして日本人觀光團款待委員たり。予深く氏の厚意を感謝し其爲人を愛慕す。頃者自作の詩集を寄せらる。之を繙くに吟誦措く能はざるものあり。乃ち柳瀬、中村兩氏に囑して之を翻譯し上梓し、以て同好の士に頒たんと欲す。然るに往々譯語の生硬なるものあるは、偏に拙速を甘んじて巧遲を肯せざりし予

の罪なり。他日再び兩氏を煩はし推敲して之を金玉にするの時あらん。讀者乞ふ諒せよ。

明治四十三年七月東京築地客舎に於て

太田覺眠識

千九百十年二月一日浦潮より

マトウエーエフ氏の書簡(意譯)

深く尊敬する太田氏よ。芳墨に接し喜悅極まりなし。拙作を和譯せらるゝ事は、予がためには大なる光榮にして且つ深く満足する所なり。惜むらくは、此集中には稚氣と粗笨の誹りを免れざる作多し。されど中の小數の作物に於て、常にわが念頭に懸かれるは國民は睦ましく平和に生活せざるべからずてふ思想なる事を足下は見出し給ふべし。予は云ふ。

恐ろしき兵士なく、

世には平和の花咲くべし。

もし足下の企圖にして成功せんか、予は予の生涯に於て尙一つの幸福の時を有する次第なり。昨年観光團と共に日本を訪へりし時わが詩歌の一篇は和譯せられて、大阪毎日に掲載せられたる事ありき。 謹言頓首。

ニコライ・アムールスキイ(假名)

エン・マトウエーエフ

は し が き

此詩集は予が、ニコライ・アムールスキイ及びグルホフカの
ゲイネ及び其他の假名を以て十年間に渡りて新紙『ダリニ
ーウチストーク』に掲載せしものなり。

目次

惑ひ	一
想ひ	五
感慨	三
かゝる時	六
黒き帳に覆はれたる光	六
基督復活	三
時は來れり	三
祭の祭	六
海岸	元
正服	三
元旦	三
出迎	六

移民の葬儀	四二
追想	四五
赤子	五〇
唄	五三
ウラヂナストック新紙に呈す	五五
移住民	五六
青海原	五六
人形	六一
歌	六六
歌	八〇
冤罪	八二
樺太の少女	八八
現時の争ひ	九〇
セクンテイヤの憂ひ	九三

女王	一〇三
最終	一〇七
夕霞	一一一
博愛の紳士	一一三
恐ろしき變事	一一四
ゴイゴリの記念	一二七
鐵中の錚々	一二七
支那移民の戀	一二九
ウッスリーの女神	一三三
巡禮	一三七
支那大官の行列	一四三
肖像二ツ	一四七
現代の騎士	一四九
地方移民の思ひ	一五七

活劇	一六一
あひゞき	一六六
鹿獵人	一六八
十二時は打ちぬ	一七〇
春の歌	一七二
往時のわれ	一七九
現代の主意	一八四
歌女	一八六
見よ	一八七
空しき喜悅	一九〇
幾何ぞや	一九二
些事	二〇一
同じからすや	二〇三
パリスの裁き	二〇六

四

新年.....二〇九

——目次終——



原 著 者 マ ト ウ エ ー ノ 氏

9102.

в!

в Присуде

твиемъ
вотъ мнѣ
Антонкии
изъ бѣлѣ-

вникъ бору
в еладѣмъ,

рѣо канѣрѣ
летѣрѣрѣ
мѣсѣмъ
ладѣмъ

содара
субѣрѣ!
вотъ вѣмъ
внѣ вѣмъ
во емиу
внѣ, вѣмъ
в, Антонкии,
во переде-
ано вѣ рѣрѣ

Антонкии

Владивостокъ, 1 февраля, 1910 г.
Глубокоуважаемый
Отец - сын!

А былъ очень обрадованъ Вашими
письмами.

Со величайшимъ удовольствіемъ
далъ свое согласіе на переводъ моего
скромнаго изъясненія на японскій
языкъ, считая что для себя, да и
для моего семейства.

Но сожалѣю въ томъ сборникѣ
моихъ писемъ, изъ которыхъ, да и
изъ моихъ изъясненій.

Но и въ томъ случаѣ, что найде
те въ своемъ сборникѣ, то въ случаѣ
постыдно великодушнаго моего письма
о томъ, что народная необходим
ность въ дружбѣ и мирѣ.

Въ заключение:

„Не будетъ угрозы солдата“

„И миръ въ токомъ будущемъ!“

Вамъ желаю удачнаго успеха въ вашемъ
предпріятіи - и буду мнѣнъ въ моемъ
здоровьи еще одну счастливую минуту.

Въ случаѣ моего роду, во время моего
моего письма, вѣроятно съ женою, и
одно изъ моихъ стихотвореній было пере
ведено на японскій языкъ и напечатано въ
„Осака Магнито“.

съ искреннимъ уваженіемъ
Николай Смуркинъ (псевдонимъ) Н. Матвеев

惑
ひ

いと切せきに思ひわびつゝ幾度いくたびか吾れは惑へり。

争ふべきか、さてはまた

運命さだめのまゝに従ひて

深き沈黙しんまを守らんか。

或人は言ふ、嘲りて、
汝れうつけ者、夢見る子、
たとへば塵埃の中の蟲。
夢をば捨てよ。

働らく力も、活くる腕きも、さてはまた汝が生命をも抛て！
さてはまた、満ち足らひたる報いを願ふ
あらゆる望みをも断て！

彼の山を見よ、
山を移すは蛆蟲汝にあらず。

この周囲を見よ、
怖ろしきこの周囲を破るは汝が任か。
をこなる夢を捨てよ、
而して身に懸かる運命に従へ！
しからずば限りなき苦しみに汝が神経痛まん。
其數少しとはいへ其身を捧ぐるに躊躇せざる
他のものは思ひ上がりて予に言へり。
怖れず臆せずこの世を見よ、
汝が崇むるは夢にあらず、

もし人にして世と戦はず
手を拱ぬいて爲す無き生命を經^へ
徒らに其運命に従がは
此世は如何になり行くべき？
軒の雫も石を穿つを忘れず
その雫にならへ。
毒する運命との戦に
聖^{きよ}き燈^{とも}を消さずあれ。

想
ひ

心は懶く、どす黒く、いひがたく、
限りなき思ひは之を嚙み
聊かも容赦する處なし。
晝も闇き夜も、吾は悶^{もた}え疲れ
やましき想ひに惱みて
長く長く眼を合はさず。

如何に賤しき凡俗の時代よ、
如何に病める脆き人種よ、
憐れなる奴隷の卑劣さよ、
生は耐へざる重荷になやみ、
聲なき柩より吹き來るごとく
墳墓の冷氣は到る處に滿つ。

力ある高き歌聲うたこゑは聞えず、

愁ひに淋しき吾等の調べには

神通の力なし。

たゞ虚偽の望みと野卑なる苦痛とを

賤しき時代の詩人は歌ふ。

想

畑のうつ穂の如く

吾等は微かなる異變にも低く首を下げ

身を屈む。

ひ

風吹かんか、吾等は戦慄おのかん。

口は拙なく辯解の言葉を吐けど
争ふを怖る。

吾等は天下の事にたづさはらず、

物數ならぬ空しき希望に充たされて

たゞ獨り生きたり。

網に掛りし獲物を怖るゝ無智の小兒の如く

吾はそれを畏れ、それを救はざるなり。

たとひ百萬の人身邊みぢかに斃るゝとも、

吾等は耳を覆うて其悲嘆の聲を聞かず、

吾等自らの平靜を破らざらんを希ふのみ。

また高潔の思想を好まず、

光明の思想を退けて

枯木寒巖の不動を愛す。

卑劣、強迫、偽善、窃盜、

いよく出で、いよく暴に、

いよ／＼出で、いよ／＼厭ふべく
世は無法の勇者の天下なり。
されど彼等は卑しき民に尊まれて
巧みに其跡を晦まし、
其影だも探るによしなし。

生は生にあらずたゞその芽生のみ、
吾等は子孫に對して辯解の言葉無し、
靈に與へられたる力を空しく

地下に埋め去り、
かくて之れを忘れ了りぬ。

眠れる同胞の起き出づるは何れの日ぞ、
汝が肩より厭ふべき重荷を捨て去るは何れの日ぞ、
汝等勇ましき思想に充ち満ちて奮ひ起ち、
心を一つにして天下の事に従ひ、
新らしき道に進め。

感
慨

復活せり。
されど望みし平和は何處に、
基督教の愛は何處にかある。
到る所罵詈の叫びに満ち、
到る所血は注がれて昔に變らず。
基督は復活せりと大なる福音は

感

慨

人々の口より口へ傳はれども、
人は猛惡の氣に充たされて
自ら受けし耻を忍ばず。
偽りの口を極めて讚美を稱ふれども、
基督の使徒の上には
尖れる小石の飛ぶ事は停やまず。
吾は新らしき生涯の兆候を視る、
時は近づき時は來らん。

重き鍵鎖は解けて
幾度となく血潮に渴き、
猛り狂ひしさきの勇者は
新らたなる思想、平和と愛の福音に感せん。
劔は尙ほその輝くに任せ、
兵器はその鳴るに任せ、
また砲聲もその空中に轟くに任せよ。
總て此等は永遠に飛び去るべし。
人の手は人の上に揚らず、

彼等は蹶き倒れざるべし。
怖ろしき兵士もなく
世には平和の花咲くべし。
百萬の手は故郷遠く離れず
闘ひの故にはあらで平和の爲に船舶は走り、
其時赤心まごころの叫び聲は
空高く沖ひいらん。
基督は復活せり、復活は偉大なり、
基督は復活せり、基督は復活せり！

かゝる時

首を昂げて面悪く、も立ちし時は去りぬ。
 怒れる眼を以て周囲を睨み、
 戦鬪に運命を決せんとせし時は去りぬ。
 苛酷なる生活は汝に報ゆるに嚴にして
 汝の頭上に轟きし雷は

汝が若き生活の夢を破りぬ、かくて
 かの光明遍照の日は去りぬ。
 その日は過ぎ、飛び去り、再び歸らずなりぬ。
 而して全世界、神の世界には
 光なき露満ち、見透されざる闇横はり、
 ものみな深く濃き霧に覆はれたり。
 空想は消え、總てのもの汝が胸裡に枯死し
 希望の星は前途に輝かず、
 雙手は力なく垂れたり。

傲然として冷靜に、運命と戦ひ
善事を行ふ信念なく、義憤なく、
かくて力強き翼は伐られたり。

黒き帳に覆はれたる光

むら雲の黒き帳は光を包み
黄金さす日を目路より隠す、

かくて到る處に暗き夜の影は横はる。
此凶日に、此惡日に、
若き勇士は其力を度らず、
恐ろしき誤りを知らず身を挺して戦ひ、
右方左方に砲火を飛ばして
彼は手痛く敵を破れりと思へり。
されどそは果敢なき夢にして
暴れたる狼の叫び、鳥からすの鳴き聲の如く
狡猾なる敵は四方に起りて勇士に迫りぬ。

彼等は手を揚ぐる力もなく、
若き血潮の冷えしと見て、
その若武者に打ち懸かりぬ。
凄まじき響きに若者の目はくらみ、
力抜け、屍となりて彼は倒れぬ。
彼は運命と戦はんとして
若き命を空しく散らせるなり。
彼は他界に静に不安の夢を結べども
彼の周圍に群れなす敵は歡び祝ふ。

基督復活

喜びの叫は響き渡る、
基督復活せり、復活は偉大なり。
千年の昔に於けるごとく
群がれる聲は響き渡る。

人々は喜びの接吻し
皆互に相抱けり。

基督の忠僕の如く

愛人兄弟に對する如し。

總てこは誠心まごころを以て行はれし事を

吾が心は切に希ふ。

されど吾が確信は消え

疑ひの根のみ固し。

吾が耳は之れを聽くに物憂く

吾が心に映ずるは

イスカリヲドが醜惡しやうをの心と

ファクセイばらの偽善の姿。

時は來れり

時は來れり、
擾亂の時は再び來りて
人々互に戦ひに向ひ
怨みの劔を抜き拂へり。
其様はいにしへの蠻族が
靜かに治まる今の世の
文明人の身に入りて
目覺めしものと吾は見る。
晝の光は夜の闇に覆はれ

再び生血なまぢの臭ひ起つて
血潮は河と流れ、
戦ひの雄詰をたけび頻りにして
死の前兆こそ現はれたれ。
善きは人々に忘れられ、
暴らき憎しみのみ漲り渡り、
心に残る唯一の望みは
泰平の世を修羅の巷に化するにあり。
かくて勝者は喧しき榮譽と諂ひの讚美とに酔はん。

敗者の地には歎聲と號泣と
絶えず響かん。
時過ぎて光明の來らん折、
齒ざしりして迷ひの淵を曉り、
長き柩の列を見て
妻と父と兄弟との涙を見て
彼は自らを殺人者と叫び
首を垂れてもがき、呪ひ且つ叫ばん。
此時なほ無法にも殺生を

頌讚するものも多かるべし、されど
彼等の殘忍なる宣言や既に遅く、
其凱歌の聲久しからずして
彼處に此處に
無碍の長廣舌を振つて
聖者——勇者は立つなるべし。
あらゆる人類の上に、大地を震はすばかりの
平和の叫び鳴り渡らん。

祭の祭

祭の祭は基督の聖誕日なり、
十字架の軛を忍び、
人類の救ひの爲めに深く苦しみ、
人類の爲め十字架に上げられ、
其死を以て人に
人は理想の爲めに苦しまざるべかららずと教ゆる
其聖誕こそこれ祭の中の祭なれ。

海岸

吾人も彼の如く愛し愛して死に就かざるべからず。
此神妙にして至聖なる日、喜ばしき日に、
心より雑念を去り黒き曇りを拭ひ、
怨みを忘れ、敵を忘れん、かくして
心を無限に愛の統御に任せん。

烈しき風の
高き樾を揺り動かすを見たり。
茂れる林は鳴り、
波は浪を呑んで
空しく狂ひ叫び、
懸崖に當つて碎け散る音を聞けり。
絶壁を遙かに
鷺は傲然と輪を描いて飛び、
自然は自由にして氣高き生命の中に呼吸し、

わが疲れし心に忘れし想を呼び覺ます。
此時吾は切に望みぬ、
この偉大なる生活に生き
湧き返る怒濤の上に高く
鷺と共に雄飛せん事を。

正 服

(ダイネに擬ねて)

『黑色の燕尾と襪、
巧に裁たれし其衣服、
ア、たい心に愛こそあらまほし、
清き愛汝が心にあらまほし』

ゲイネ

拍車と記章と肩章とは
目もあやに光り輝き、
軍刀と肩章と邊帯とは

全地を満たすかと疑がはる、
規定の色の様々に
若者も正服を纏ひ
若者すら正服に飾らる。
質朴にして無邪氣なるものは
七面鳥の歩むが如く、
針に別れし計りなる
其正服は新らしく、
吾々不運者の心を驚かす。

心不具なる者は往々に
之れにて其身を包み纏ひ、
人の前にも神の前にも
虚偽の光を着て行かんとす。
正服には神殿の威嚴もあらむ
人は皆なその虚榮の人に道を
譲らざるべからず。

憐れなる神の造化を
人は皆修正を加へん事を喜び、
到る所其形を暗まして
假面舞蹈は流行するなり。

只々彼等は清き情と
愛の心を有たずして、
技術の産みし製作品の如く
この世に振舞ひ行く。

元 旦

祕密に満ちたる新しき年は
この世に進み來れり。
人は幻想に耽り、
人はなにものかを豫期し、
霞める甘き空想に沈む、されど

人々の此腐心も無理なるまじ。
時は近づきぬ、
世は輝やかしき星に取り卷かるゝ時來らんとす。
聖にして喜ばしき時は來らんとす。
この時故郷は正義と善の日を見ん、
この時吾等はわが事を行はん、
新たなる年は何事を持來るとも
臆せず倦まず親しく進まん。

出
迎

三頭立の車は路を走り、
馭者は口笛を吹き且つ叫ぶ。
たけくす早く進み、進み、
寸時も休まず進み、進む。
膽あり威ある盛んなる若者は
新らしく美しき腰掛に坐し、

模糊たる前途を見守るなり。
玉のごとく涼しき彼が眼は
剛健にして覇氣に充ち、
燃えんばかりの晴衣は
あでやかに且つ新たなり。
翁は路に静かに歩みより
低く頭を下げ、
若者に目を注ぎて呼びぬ。
『若者！待たれよ吾が男の兒よ、

暫しなりとも吾と語れ』

若者は此邂逅に心嬉ばず、

翁を見下げながら、暫し

翁の沈みし大智の言に耳を傾けぬ。

翁は云へり

『男をの兒こよ可愛の者よ、

吾にも青春の時期ありき、

勢氣は吾が心に沸きぬ、

無智の空想も翔けりぬ、

されどア、時はきぬ。

力も失せ火も消えぬ。

生活の苦き負擔は吾れを枯らしぬ。

吾が蹈みし道を汝も辿らん

時來る其時は汝が甘き眠りの夢も破れん』

されど愚かなる若者は

最早翁の豫言と忠告に耳を貸さず、

此邂逅を逃れんと心苛つて馭夫に迫りぬ、

『時代遅れの老爺何の謔語を吐くや、

汝の例は吾を教ふるに足らず、
去れ老耄爺！』
かくして彼等は別れたり。
翁は足元弱く静に歩み始めぬ、
若者は三頭立の馬車にて
飛ぶが如くに行く手を急ぎぬ。

移民の葬儀

塵深き路を彼等は群なして來り
恟々として路傍に沿ひて歩めり。
老者の白頭は低く垂れ、
青年の顔は憂ひに充ち、
凡て静けき悲しみに包まれたり。
彼等は愛兒を葬り兄弟を葬れる
新來の移民なり。
遠く故郷を後にし

心強くも遙々と來し報いは
悪運の手より悲しき死を以てせられぬ。
悪運は望みを懸けし愛兒を奪へり、
産みの母の涙は限りなく
老いたる父も聲に泣けり。
彼等の愛は亡びしなり。
彼等は夢にも若き兒に此事あるを知らず、
輝く運命を若者に待ち、
その若き力に多くを望みて

新らしき生活に伴ひしが
そはやがて墓に導びく事となりぬ。
歎きと涙とを以て彼を墓穴に落とし
冷たき土にて彼を覆ひぬ。

追 想

悪しき日は永く續きぬ。

此日は思を惱まし
此日は心を倦ましむ。
天地は厚き霧の幕に蓋はれ
霧は深く病める胸を腐らして、
闇に悲しき鐘の音聞ゆ。
その響は世に凶事を傳ふる
弔ひの知らせなり。
鐘はかくさゝやきぬ、
絶えざる争鬭の巷

情を知らぬ辛き世に立ちて
こは、生活すまひの爲めに
美しくしかりし花を散らせる少女なり。
搖籃の中より
重き霧は彼女を壓し、
淫事と虚偽の勢強くして
汚れし空氣は彼女を包めり。
深き、胸苦しき霧も
神のみ心の閃きをば消す力なく、

彼女は人生の偽り多きを悟り
不義と悪とに對して其身をかためし
優にやさしき少女心は、
はげしき運命と戦ひ難く、
悲しいかな彼女は
早くも苦き杯を乾せり。
不義と悪とのあさましき世に
かくてその荅の花は散り、
その骸は深き墓穴の中に横はる………

輝やかしき日は出で、
暖かく晴れぐと
美しくう周圍を飾りぬ。
されど何物の方も彼女の眠りを醒まさんは難かるべし。
永く久しく悪しき日は續きぬ。
此日は思を惱まし
此日は心を倦ましむ。

赤子

わが手に抱きて吾れは汝を揺する。
わが兒よ。

揺りつゝ汝が行末を想ふ。

汝の幼時の過ぎむ時

汝の生涯は幸福に満つべきか

あるひはわが悲しみを繼ぐべきか

わが悲しみを、

わが兒よわが骨肉よ、

汝はわが手に遊び戯る。

人生の暴風雨あらしを汝は知らじ、

汝の樂しみは清し、

世は慘忍の刑罪を以て成人を待つ。

數多の暴き獸は彼等を脅かして

刑場に導くなり。

義人の一生は苦しく重く

不義者悪人の世は多く安し。

われ等は遠く純潔を離れて
深く悪と虚偽の泥に汚れたり、
この卑しきわれ等が上は問ふな。
汝は幼時より心を固めて
虚偽の想ひに心向けず、
人の爲めに其全力を盡し、
限りなく情と愛との心を持って。

唄

唄
艤ひなりし舟は岸べに浮び、
家族は若き渡航者を遠き旅路に送らむとす。
袂別の辭も濟みて強き力は舟を突けり、
白き帆は掲げられたり、
汝、故郷よ、平穩なれと
航海者の眼は希望に燃え、
暴風強雨なにかあらん

運命の大洋にありて其胸は、より自由により軽く呼吸く、
いと疾き舟は底なき黒き海面を滑り
見知らぬ國に彼等を運ぶ。
遠く遠く疾く變り行く夢を載せて
舟は再び歸り來るや否や。

『ウラヂヲストック』新紙に呈す

この新らしき地に
汝は生れ出で、今や十年を重ねぬ。
此長き任務を汝は
得る處なくして過ぎざりき。
時に汝は路上の燈となりて
闇に吾々を照しぬ。
時に、迫害と憤恨との間に孤立して
静に自己の道を進みき。
今や吾々は汝に祝意を呈さむ。

輝く正義の光りは
わが人生に注がれし事多からずとも
其數頁を其跡に止めたり。
汝同勞者！此年月の間の其潔き事業に向つて
吾等が呈する謝意を受けよ。

移 住 民

饑渴は憐れなる家族を泣かしめ、
艱難は彼等の身に絡はりて
農夫勞働者は苦しみ歎きぬ。
『故國の田園は繼母となり
瘦衰へて産ますなりぬ、
故國は狭く身を置くに處なし』
苛酷なる、生れ故郷——故國を捨て
遠き黒龍江を指して
重さなる艱難憂愁をも

不運なる彼等は長く堪へて
田園多き目的の地に來りぬ。
たゞ要するは汗と永き労働となり。
新らしき田園は花咲きたり、
彼等の收穫は有り餘らん、
かくて故國の農夫は其悲しみを忘れん。

青海原

青波寄する海邊に立ちて
少女は悲しく悲しく泣き叫べり。
荒海は湧き立ち寄せ返りて
少女の足を洗ふ。
『少女よ何をか泣く誰をか待つ
汝が聲は誰をか呼ぶ？』
『今日妾が愛人は歸り來るなり、
愛人は海邊に待てと言へり、』

別れて後の長々しさ、
今日妾は彼れを迎ふるなり』
間もなく日は入り光は消えぬ。
されど少女の伴は來らず、
その愛人の影もなし。
少女は泣いて止まず
戀人よ來よと呼び叫ぶ。
荒海は騒がしく鳴り響きぬ。
立ちし少女は死せしかとばかり

突然黙して前方を見つむ。
取り亂せる少女の前に
寄せ來る荒波は
冷えたる屍を持ち來りぬ。

人 形 (影像)

見よ友よ此人形を、
愛らしき小兒の如く走り戯むれ
レース天鵝絨リボンを着
體を固くコルセットにて緊め
細き腰は折れんとし
鈴の如き言葉は絶えず注がれ
肩に華美を盡せる肩章を載せ
手には腕飾の光まばゆし。

—

縹子もて包める胸間は數多のブリリヤントに輝り
麗はしきボンネットには駝鳥の羽翫る。
のみならず此帽には
流行慾を充さんとして
色々の光と花壇と新奇の裝飾溢れたり。
『ア、美人』よとの讚稱を聞くに渴きし
老いに老いし醜くき
其顔は面被の中に潜めり。
絹布のユブカの亂れ狂ふ裙すれ

唇を薔薇に染むる口紅は少からず
高價なる白粉香水香油の費は莫大なり。
事實は明瞭なり驚く勿れ、
四方に散る馥郁たる香と
裝飾流行の慾望の
消費する額は巨萬なり。

二

金庫を鑰にて搔集むとは宜なり、
紳士は富める請負師にて

手輕に巧に身振早く、
技師と結託して
期限を遅れず一割納め
事務を捗取り巧に動き
動かぬ基礎を固めんために
支拂時間を氣儘に決めて
萬事を壓ゆる手段とし
賣買凡て正價と定む——
蚊の刺す隙も無きばかりに

事を巧に準備し
濁水に魚を漁るなり。
かくして彼は鏟もて
金庫の金を把集む。

三

彼女は卓れし人を夫とし
夫は疾くより天才を發揮し
年俸僅に一千金なり。
されど駿馬二頭を有して

壯大華美の邸宅を構へ、
數百金を周圍に撒き
敏腕家として長官の覺え目出度し。
ア、彼れは何れの處まで發展せむか、
もしヤクトたらざれば
彼はボンバドウルとして何處にか現はれん。
無盡藏なる原料あり、
そは中華の國の黃顔兒にして
幾多の者に優れし事業を與へ

數多の者の乳牛たり。
他人に語るべからず、此事を
われは親しきわが友に
最とも祕密に傳ふるなり。

四

紳士は此地の名望家にて
夫人と京より來りしものなり。
土地の社會に儀表を示し、
土地の人士に流行を蒔く、

彼は鏝一文の現金をも持たざれども
良き獲物を捕ふ。
祖先の口傳を謹んで守り、
到る處に借財を重ね、
代理人、委任者、株主と
一つの軀を使ひわけて
吾等に善例を示すなり。
良心と廉耻とを失ひし者の如く
貴顯紳士の様をなし、

一時に兩主に従ひ、
苦もなく傷む心もなく
日々安らかに其日を送る。

五

此種の富者が惜し氣もなく
數千金を費すも道理なり。
されど他に
雇番頭小役人を夫と頼む女あり。
夫の位置の賤しくして

収入もいと少なく、
禮もなければ耻もなき
盜賊に同じ愚民こそ
彼等が日々の相手なれ。
此等貧しき夫等は
彼等に肩を並ぶるは難し。

焦げ布に同じ流行に
使ひ果たさるゝ金こそ巨大なれ。

派手なるボンネットの價は高く、
 そは皆不運なる夫の重荷なり、
 そは皆重き不幸の泉なり、
 そは皆夫が徹夜の勞苦となり、
 そは皆歳若くして夫をば盲目とし
 そは皆無限の苦難の源となる。
 これがため彼等は多くの非難を受け
 官省は多くの損害を被り
 同僚は危き陰謀をなす。

されど可憐の夫人は
 何も知らざる如く
 自由の鳥の如く飛移る。

六

形 人
 焦げ布に同じ流行に
 消ゆる金こそ莫大なれ。
 派手なるボンネットの價は高し。
 されど苦心は空しくして
 萎みし薔薇花は

化粧するとも若返らず、
其醜くさは飾らざるに等し。
如何にせむ、如何にせむ、
美人と呼ぶに相應しからず。
一女一日虚榮を誇る
用なく益なき空しき費用は
一家を支ふるにあまりあり。
されど心酔ひて臭氣と貧とに
溺れつゝある彼れが身には、

家事を思ふ心もなく
たゞ榮華に其身を飾らば足り、
たゞ顯官と虚榮に淫すれば足り、
新奇の流行に飾らば足る。
女神よ！はや其翼を縮めよ
汝が努力は空しく了らん。
駱駝の針の孔を潜ぐらんは
優しき女子の心を制するよりも易し。
吾人は此諷刺を以て

人々の反省を促し
彼等を不便ふびんと思はしめむ。

歌

汝は今わが墳墓の地を捨て、
心歪みて異人を嫌ふ
遠き支那へ行くとても、

ゆめ其悲運を呪ふ勿れ。
用を濟まし、軍用靴に
休まず倦まず銀貨を充たし
間もなく汝に送り與へむ。
愁傷に沈む勿れ
涙を拭へ、可愛の者よ。
支那の貴族の身を飾る
肩より垂る、黒貂のユプカと
金もて美事に縁取れる

西藏産の毛皮もて織りなしたる上衣とを
吾は御身に土産せむ、
行くに繭紬の衣あり、
寝るに鵠の毛蒲團あり、
汝が孤閨の心を慰めんため
幾多の支那人の血を流さん。
黒き眸の持てる御手をば
強くやさしく愛するは罪か。
行きく、 遇ふ村も貧しき茅舎も

勇ましくわれは烈しき火燄に渡さむ。
足弱き老の身も容捨せず、
婦女子の上をも憐れむまじ、
汝は今わが墳墓の地を捨て、
心歪みて異人を嫌ふ
遠き支那へ行くとても、
ゆめ其悲運を呪ふ勿れ。

歌

夜は暗く艦は怒濤を蹴ッて鳥の如く飛び、
若き少尉は艦橋の當番勤務に立ちて
見張れる眼は鋭く遙かに霞める大洋に注ぎ、
久しく闇夜にもなほ立つなり。
父母との對面を待つにもあらず、
美しき妻を待つにもあらず、
彼の心には他の希望潜めり。

歌

喜び勇みて、彼はまさに來らん樂しき期を
必ず來らんいと大なる利金を待てり。
近き港に入らば石炭を積まん其時を
（そこにて二割五分の利金を其の檢番少尉に贈る）
さればこそ若き士官の心は
その事をのみ思ひ續く。
（尙又鹽肉にて利を收むべき使命あり）
夜は暗し、怒濤を蹴ッて艦は鳥の如く走す。
若き少尉は艦橋に當番勤務に立てり、

見張れる眼は鋭く遙に霞める大洋に注ぎて
闇夜にさへも久しく立てり。

冤 罪

一人の農夫あり、
或る祭日に隣村に赴き
小宴に列りしが、
したゝか酔うて河原毛馬の始末も出来ずなりぬ。

親切なる人々は車に彼を抱き載せ
車を馬に曳かせ遣りぬ。
農夫は行き行く間に睡氣を催し、
重く車中に打崩れ
安き夢路に辿り入りぬ。
夏の日は暑く照り輝けども、
彼は車の動揺も知らず
いよ／＼深き眠りに沈めり。
河原毛馬な時を得顔に

青草を摘み食ひつゝ
少しく道を逸らしぬ。
村童は群をなして野原を逍遙ひ、
馬と車と車中に臥せる農夫とを見て、
馬鹿爺と笑ひ興じ、
一大事業を企て、
河原毛馬を静に解き去り、
手自ら車を引き行きて
二本の轅の間より

高き柵の丸太木を
深く車に狭み入れて、
爲すが儘なる河原毛馬を
またも静に車に付け、
智恵ある事業をなしとげて
思ひ／＼に野に散り行き、
高き草叢に身を潜めて
様子如何ならんと窺ひぬ。
やゝあつて農夫は目を覺まし

寢惚眼に馬を鞭てば
馬は驚きて前に動けども
柵に掛りて車は行かず、
丸太は曲りて弓をなし、
小供の笑ひは草叢に起れり。
農夫の驚きはたとへん方なく、
河原毛馬が丸太を挟んで立つは不思議と
思案に餘りて農夫は云へり
『こは妖魔の業なり』と。

せんかたなく車を下り、
妖魔を口に罵りつゝ、
なせし悪戯を直しけり。
何處よりともなく突然に
角を尖らし尾を振り
出沒自在の妖魔現はれて
『叔父汝は何故にわれ〜妖魔を罵り、
われ等が仲間を呪ふぞ、
われは汝に忠告せん、

われく、仲間の頭にも
童が汝に爲せし如き
悪戯は思ひ浮ばざるなり、
兒童は吾等が師匠なり、
空しく妖魔を呪ふを止めよ、
人の悪事は悪魔に勝さる。』

樺太の少女

寒風は戶外に吹き荒れ、
降り注ぐ雨は車軸を流す。
この時湯屋の向ひの扉際に
酸酒クワスを鬻ぐ少女あり。
通りかゝりし老婆
少女を憐み慰めて、
『少女、おん身は風邪引くべし、
おん身が家に疾く立歸れ』
されど少女はさわがす

『死は不運兒になにかあらん。』と
少女は扉際に立残り、
酸酒一瓶を賣らん爲めに。

現時の争ひ

われは、胸を躍らして、狂ひ怒れる
白髪雪を欺く勇士の集會を見、

又其辯舌を聞けり。

われは思ふ

『今此處に集へる翁等は
皆、故國の飾りと美の輝きと
けだかき理想との爲めに
互に争ふ。』と

われは深く喜びて彼等に近寄り、
心をときめかせつゝ耳を澄まし、
が、
われはわが目を疑ひぬ。

強く憤り身を悶へ
血相を變へ聲を震はして
高らかに一人の翁は云へり。
『斯くては事は不正なり、
此儘事は濟むべからず、
賄賂の不足四半圓を
吾れは未だ受取らず。』

セクンテイヤの憂ひ

何故か、芝罘^{チイフウ}市舉りて
常になく動搖めき、
狭き横町に種々の人々集りて
拳を振り顔を荒らげて何事か罵り合へり。
何故、彼等は今日に限りて

早朝まだきよりかく騒ぎ立てる。
彼等は狂ひしか、酔へるか、
何故なれば彼等は附近なる
支那の移民セクンテイヤが
家の窓と戸口とを視詰むる。
移民セクンテイヤの運命は
かく妬ねたましきものならじ、
彼は二人の妻を持ちて
二女の心は歪みに歪む、

一女は清人にしてチャンサと云ひ、
他は露人にてマリヤと呼ぶ。
彼等は屢々争ひ騒ぐ故
セクンテイヤは妻女の處置に窮し
心遣ひの涙に泣けり。
二女は少しも拳を怖れずして
セクンテイヤの家に争ひ絶えず、
罵詈の聲呻吟の聲外に漏れ、
激しき衝突に日なく夜なし。

たま／＼争ひを制すれば
烈しき平手は頬を見舞ふ。
彼は吾家に慰みなく、
憂ひに身を投げ殺すとも
たゞ此苦みなかれと願へり。
妻を治むる威厳なく、
不幸を忍ぶ氣力なく、
彼れはわが家を出で、行きぬ。
戀しき妻は追はぬかと

彼は行きつ且つ顧みつ
追想を遠く過去に馳せぬ。
青春、幸福、自由の時に
今の此憂愁を知らざりし昔に
彼は一人の悪しき妻も持たず、
海老、鱈、白魚を漁りて
漁船に貧しく暮したり。
計らずも彼は隣家のヂャンサを戀ひして
媒人を立て、妻としたり……

如何にして大金を得たりしか、
其記憶は新なり、如何にして彼は其生國に反きしか、
其記憶も新なり。
ヂャンサと別れて
美はしき浦潮市に向ひ、
此處に初めは力役に服し、
汗を流して夏も働き冬も働きぬ。
金を貯へて魚籃を贖ひ
蠣よ、鱧、白魚よと

聲を限りに叫び歩きぬ。
思ふ所ありて遂に呼び賣りは止め、
魚籃を捨て、請負を初め、
一日と去り一週と過ぎ、
彼が手下に多くの仲買集まり
大請負師となり威嚴も添ひ、
技師すら彼を敬ひて
事業の爲めに屢々彼を招待し、
彼は身に餘る敬ひに酔ひ

故國の宗旨を捨てんとすら思ひ、
他國の衣服の嫌味も忘れて
露西亞の燕尾に其身を飾り、
貴き故國に背き
清淨き豚尾と永く離れ
野心の限りを遂げんものと
セクンティヤは化してアレキセイフとなりぬ。
露國の娘を娶らんとする野心は燃ゆるが如し、
金に飽かして妻を募れり。

時はたてども露西亞の少女
誰ありて彼が妻たらんとする者なし……
流罪人の酔漢の娘と住めるあり。
彼は酔漢を酒に飽かし、
金の魔力を以て迷はし、
不運の少女を妻に娶りぬ。
生みの親なる父より受くる
絶えざる毆打と絶えざる威嚇とに
涙は河と流れて

早くも其惡運に慣れ染みたる
マリヤは移民の妻となりぬ。
セクンテイヤは若き妻と共に住みて
しばらく故郷の事を忘れたり。
同胞は彼れを非難し
非難の聲に彼の胸は碎けぬ。
生國を戀ふる心起りて
榮華の後の憂愁は來りぬ。
骨肉の溫情に浴せん事を思ひ

不運のマリヤを伴ひ切符を求めて
汽船に乗じ、
懐しき清國の岸指して船出せり。
凶事の前兆か彼の胸は憂ひに騒ぎ、
苛酷の不幸は彼を待てり。
國に歸れば平安はなく、
家族は彼を賣奴と罵り、
人々の憎しみは追ふが如く襲ひ懸りぬ。
彼は遠く大洋を眺め汽船の影を尋ね求めぬ……

女 王(新聞種)

時として、世に國王とあるは易からず、
彼は飲めども飲まず食うて飽かず、
晝は晝、夜も夜もすがら眠られざるなり。
昔、韓國の國王、
皇后フェイト美味に飽いて夢安かりしが、

突如として圖らざる運命は
無数の憂愁と困難とを持ち來りぬ。
此處に日人、彼處に清人と
四方より彼を包圍せり、
彼は勢子に取り卷かれし
兎の如く藻掻き、
驚き怖れ氣も亂れて
如何にその急に備へんかと惑ひ、
可愛き皇后の上を全く忘れたり。

如何になり行くかと
眼前の事にのみ思を碎いて
后を接吻せず、慰めもせず、
見向く暇とてもあらざりき。
后は王が憂ひには
少しも想ひ與らず、
面白可笑しく跳ね廻りて
外國公使の館より
知人を招き

傾國の美容を以て
外國商人を生捕りぬ。
いまこそ自由の身の上なれ
后は國主の王を棄て、
戀人と舩舟に乗り
手に手を取りて落ち行きたり。

最
終

旋風の物を覆すが如く
疫病は村に入り來れり。
只の戸も残さず
絶えぬ辛苦困難より得し豊年の作物を
無慈悲の火に焼く如く
病は總てを滅ぼしたり。
残れる一頭の牝牛あり、
永く久しく腕きたれども

時は來りて、酷むごき病魔に斃せされたり。

※

薄命の家の庭に

人は群れなして集りぬ。

常になき群集に包まれて、

一家の者は饑渴に泣けり。

瘦せたる老婆は悲しみ、歎き、

涙を啜りて不幸を訴ふ。

老婆を圍む可憐の兒等も

同じく泣いて哭いてやまず。
疫病は家畜を持ち去りぬ、
不運の家の十頭を
餘さず疫病は持て去りぬ。
その悲しさは言ひがたく
その不幸は度り難し、
主人は憂ひ極まつて氣も狂ひ
首を垂れて亂れ心に茫然と
斃れし牝牛を見守りぬ。

これを埋むる爲めに
牽き行かしむる牛とて今はなく、
彼は自ら有らん限りの力を盡し
村人共の助力をかりて
悲しむ群れと諸共に
村の外へと運び行きぬ。

夕霞

日は入りぬ、紅き日は。
そよ風軽く吹き渡りて
岸よりは朧ろの影流れに映り、
光りは静かに散り去りて、
み空は目榮く化粧したり……
隣家に女の罵る聲聞え、
醉漢の高らかなる唄も響きぬ。

博愛の紳士

博愛の紳士あり、
馬追ひの鞭つ様を見て
深く心に不快を感じ
馬追を捕へて打擲せり。

恐ろしき變事

君、君、君何としたる、
如何なる變事の起りたれば、
斯くあわたゞしく走り去るぞ。
債鬼君を相手取りて
訴訟事件を起したるか。
或はまた、賊に襲はれて
家を暴されし爲めなりや。

或は、親しき汝の友が
汝を罵り責めたる爲めか。
或は親しき汝の友が
死に捕らはれし爲めなりや。
或はまた、他に變事の起りしか、
もしや妻女が隠男を……
或はまた、夢に悪鬼を夢みしか。
彼の走る様は
縊死か身投げに急ぐが如く、

火事山崩に遇ひしが如し。
『新聞の記事の爲めなり』と
荒々しき答へを残して
彼は道をば走せ去りぬ。
新聞記事に驚きて
彼は斯くも朝早く
大路を縦てに真直に
長き願書を小脇に抱へ
検事の許に走るなり。

文士、汝は汝の技術の爲めに
汚名を被り罪人たらん、
文士よ、汝は判検事の
狙ひ違はぬ獲物とならん。

ゴ—ゴリ—の記念

露西亞本土の邊境にて

君が歌へる代表人は
水に隠れし岩石に
群なす殖蟲の如く
蠢々として全土を覆うて現はれたり。

見よ、主人公パウエル、チ、コフは
死せるものをば復活せしめぬ。
されど今日のチ、コフは
呼吸あるものを死人となす。

見よや、作中の人ノズドレフを、
彼は酒を呑み、歌も唄ひ、
花牌も引き、嘘八百を並べて
面白可笑しく生き残り、
今も尙ほ満洲あたりに奉職するを。

それ、無邪氣の人や律義者や
或は世間知らずに日を送る者を欺きて楽しむは、

フレシタコフにはあらざるか。
問ふも愚か彼こそは
イワン、アレキサンドルチ其人なれ。

それ用心せい、過失すな、
武士面をして意氣傲然
一步一步に威を示すは
其人ありと知られたる
デルヂーモルドの殿なるぞ。

それ、マニロフ氏は今も尙ほ
美しき空想に耽り、
進んで世に善を求めず、
また之れを期待せず、
されど場所は知らねど市會議員の
一人として指折らるゝ身分なり。

彼れ、フェリスドクリュスは、

次第くゝに成人して、

既に疾くより兄弟諸共、

一専門校に修學中、

天狗殿になりすまし、

世に出づる日は外交官。

地主ペテウーホフは

暴飲暴食飽く事を知らず

常に料理店に出入し、

烈しく禽獸の精を鵜呑みにす、
されど懷中無一物。

それ、イワンクウシンは

美衣に其身を飾れども、

昔しながらに、死にもせず

吾等が帳場に鎮座せり。

トレヤピチキン其人は、

昔の様其まゝに
筆執る業を續けて、

既に遠き昔より

數ある中の一新聞の

三面文士に出世したり。

リヤプキン式の人物も

今日なしとは言ひ難し、

犬刷毛を以て施しを貰ふ

其人なしとも云ひ難し。

シペキンも死なす生くるなり、

昔ながらに文學を好み、

われ等が祕密をわが物顔に

全市に廣告なす人は

一人ならず數多し。

他言は無用、祕密なり、

悪事隠蔽のドゥハノウスキイも

世には其數少なからず。

花牌を引き、

賄賂を取るにも、事を缺いて

酸乳皮、毛皮、七面鳥。

※

一言にし言は、

何處を見ても

君が歌ひし人物は、

われ等が眼前に現れ、

われ等が上に臨むなり。

鐵中の錚々

彼は此頃中學を卒へたり。

品性清く、意氣高くして、不法を罵り、

世を満たせる不法に對して心を痛む。

彼は不法の世に活くるを嫌ひ、

渡世の煩しきを思へり。
されど間もなく赤線帽を戴き、
慣れては権門に出入して
歎息を嚙み、不平を呑み、
官位と勳位とは前途に待つ。
同僚相逢へば
必ず増俸恩給を口にするに到り、
心に炎の燃ゆるは
毎月二十日の前日なり。

遇ふ人毎に下ぐる頭は高く、
座する時脊は弓をなし、
休日を青羅紗の机に送り、
賄賂は必ず小文字に記し、
自然の聲と良心とは失せて、
到る處収入の多きを求めむ。

支那移民の戀
(春の歌)

一日移民^{マシザ}は露西亞少女の美に打たれぬ。
もし戀人の命あらば、
膝を屈めてその美人の足下に
その豚尾髪と別れ、
阿片を好む激しき悪習をも
古びし小舎にて花牌引く事をも
賄賂を用ふ不心得をも
徒然を慰むる喫煙をも
褐葉^{ウハミツカソラ}胡を嚙む事をも

異人に對する憎しみをも
ものゝ美事に忘れ果てゝ
身には露西亞風の脊廣を着けん。
もし戀人の命あらば、
移民ワンコヤンは
必ずく洗禮を受けて
名をイワンと改め、
籃を下げて少女に従ひ、
泣顔下げて林檎やくと

呼び賣りするも厭ふまじ。
嘗て彼は戀人の
窓の下に身を寄せ、
悲しく歌ひぬ、誠心の歌を。
少女は窓の下なる悲鳴を聞き、
窺ひ見れば豚尾なり。
堪へて長く聞き居しなれど、
遂に勘忍の力盡き、
戀にこがるゝ支那人の、

小首を掴みて追ひ遣りたり。
此事ありし日より
不幸の者の歩む様は
夜半に迷ふ影の如く、
晝夜安き心もなく
以前に勝りて阿片に耽り、
激しく狂はしく花牌を引けり。

ウッスリーの女神

静かなる夜、月冴えたる夕、
少年は海邊に出で、
霞の幕引ける彼方、
岩上に立つ生物を見たり。
この瞬間に少年の胸には或もの閃き、
幻影の手に捕はれたり。
胸は空想に充ちて、
恍惚として美の影を描き、

言ひ難き美しさに心を奪はれ、
胸を躍らせて起ち上り、
深き黙想に耽りぬ。
『彼女は女神なり、疑ふべからず、
彼女はまさに水の精なり。』
艶にして婀娜たる手にて
金髪を梳りつゝある様に
青春の血を燃やして、
情は亂れ呼吸苦しく、

彼は叢生しげみに身を潜めぬ。
餓ゑし眼は

天成の美に魅せられ、

燃ゆる眼に迷はされて

山を越え、丘を越え、

藪を抜け、林を過ぎ、

危険を犯かして幻靈の前に立ちぬ。

されど……咄！こは……

支那婦人、醜き女が

汚れし髪を梳るなりき。

巡

禮

(ネクラートンラに倣ひて)

異國人の群集、

諸人種の集まる間に、

目新らしき旅人見えて

路の端を辿れり。

鬚は白くして繁く、
頭髮は雪を欺いて光澤あり、
頬は日に焼け、
眼は人懐しげにて
帽は眉を隠し、
白く長き駱駝の毛もて織れる上衣を着て
背囊を肩にし、
手に長き杖を持てり。

彼はチヨルニゴフ縣より
徒歩にて此處に來れるなり。
種々の艱難を忍びて、
巡禮の過ぎたるシベリヤ全土の
道は長く且つ辛らかりき。
猛獸に逢ひ、惡漢に追はるゝ恐れあり、
砂漠を通り
深き森林を横切り、
嚴寒極暑に堪へて、

猛獸も、惡漢も、
老の身に害を加へず、
親しき孤兒に對する如く、
到る處に門戸は開かれて
珍客に對する如く
食を供へ道を譲りぬ。
町々村々の寺院に詣で、
靈山聖地に杖を曳き、
清き聖者の尊像を拜しぬ。

巡
禮

何故、老後の安息を捨て、
老い耄け瘦せし翁は
盡くる期なき長旅に上りたるか。
翁はたゞ熱誠に驅られて
遠く遙けき土地へと旅立ちしなり。
親しき同胞は、
遠き此地に住めるなり。
長き旅路の盡きし時、

東西も辨へざる此土地の
荒れたる林の中の
晝なほ暗き谷間にて、
遠く去りたる家族を見たり。
安く静けき心を以て
海を渡りて極暑の地の
生國指して彼はまた
汽船を求めて乗行けり。

支那大官の行列

見よや、
名も高く徳も高き人は來りぬ。
護衛は前きに立ち、
いかめしき大官の
馬は疲れて遅く歩めり。
そよ吹く風は髭を吹き

廣き上着の裾を拂ひ、
脊には貴き長髪動きて
思ひ上がれる様には
名將の品位備はりぬ。
鬼をも拉く勢ひにて
勇ましき軍隊は背後に續き、
だゝ大官の命あらば
彼等は火の中にも水の中にも
何時にても一齊に

彼が手足と動くなり。
行手にさ迷ふ者あらば
疾くく足早に逃げよ、
後顧みず疾く逃げよ。
もしも足を惜まば、
手痛き竹の荷車は
汝の爲めに備へたり、
行手を遮るものあらば
われ等は忽ち汝を捕へ

足に任かせて蹴飛ばすべし、
産みの親をも忘るゝ程に。
多言を用ひず土下坐せよ、
勇敢義烈の兵士と共に
わが大官は来るなり。
頭を下げよ、土下坐せよ、
彼れは戯れを嫌ふなり。

肖像二つ

心善き若者は
且つ歩み、且つ謠ひ、且つ吟ず。
病魔も若者を煩はさず、
彼に悲哀もなく、憂愁もなし。
そのけなげなる脳裡には

世は小さく狭し。
その謠ふ聲は調べ多く歌に富めり。
たゞ吹く懐中の秋風。

❀

他の一人の若者は、
威厳高くして濫面を作る。
汚れし心は下劣なる想に充ち
淋しき脳裡には浮世も笑はず、
言葉少なく歌少なし。

只だ感ず懐中の暖かさ。

現代の騎士 (断編)

買ふべからず賣品にあらず、
一舉一動逢ふ者をして褒貶止ましめざる
ドン、グアノは市中を行く、
彼は名高き騎士なり。

愛嬌なき其顔には
氣高き人格を寫し、
双肩と新らしき正服には
功績の報酬耀く。

道を避けよ、わが黨の士
偉人に道を譲れ、
彼は譽れなる功績を多くなし、

また將來も之れを多く爲さんとす。

リチャルドと共に
十字軍に加はりしにあらず、

されど、公金を偷み職工を斃す。

戦敗れし異教徒は驚きて其前を逃げやらず

(逃げ去りし支那移民は

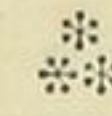
其數只一人のみならざるは論なし)

彼は肩より踵まで甲冑に身を固むれども
昔の騎士の如く突貫を好まず、
これ現代の騎士なればなり。
たゞ空想に耽るは同じ。

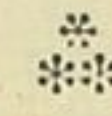
破壊の精神もなく、
敵と戦うために進まず、
平和の人の耳を驚かす事は
屢々巧に之れを演ず。

否、この種の騎士は、
時代精神の産物にして
け高き心には美しき企てを抱く。
彼は木と石もて造られ、
もし風にして彼を倒さず
もし雨にして彼を湿さず
もし其礎にして朽ちざりせば
彼は得がたき傑作なり……

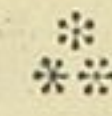
われ等を柩に入れ其骨をば
蛆の食ふに任かすは言ふを待たず、
彼の行爲はわれ等が子孫の耳を喜ばし、
彼は爲せる偉業を語るを耻ぢて無言に傳へん。



令夫人たる其情婦は、
嚴かなる侯爵夫人の如く
美しく尊き歩み振りは孔雀に似たり。



其胸間を飾れる寶石は
燃ゆる星の如く、
良人の築きし城廓の
輝き光るかと思はる。



傳へ聞く、彼は嘗て
此戀を得んとして
公金を以て武備して
其競争者に當れりと。

餘りの事に茫然として
競争者は遂に其妻を譲り、
たゞ黄金を受けたり。

天母マドンナよ、
長き歳を彼等に與へ、
貴き夫婦の生涯に
幸ある花を香らせよ。

地方移民の思ひ (プシキンに倣ねて)

馬車を驅りもしくは徒歩にて
浮世に存ながらふるは何時を限りぞ、
市立病院にて
吾は朽つべきか。

或は又、馬賊の手に捕らはれて
林中深く運ばれんか、
狂へる白痴と決闘なし
其彈丸に斃れんか。

或は又、水なくして
烈しき渴きに枯死せんか、
スウェトラン街頭の
夏期の大雨に溺れんか。

或は又、大犬に噛まれて
死につかんか、
或は又、酔へる水夫の手に
容捨なく打殺されんか。

或は又、歩道の穴に吞まれて
不具者となり、
或は又、吾が住む市街の

塵埃に飽きて亡びんか。

或は又、友と酒を汲んで

空虚の人生に悩まんか、

或は又、大なる賭に損をなして

毒を仰いで死すべきか。

馬車を驅り、又は徒歩にて、

浮世に存らふは何時を限りぞ、

市會の會議も、

此問題を解決する能はざらん。

活劇 (擬狂詩)

淋しき秋の夕、

醉へる小役人は家路に急ぐ、

破れ古び垢付きたる外套を着

小脇には徳利を抱へたり。
四邊静かにして音もなく、
濁れる潦は光り、
降る雨は細くして蕭々たり。
彼が小さき家の前に立ちし時、
雨霽れて月影射しぬ。
此時醉漢の心の中には
『群れなす子女の間に
怒れる妻の罵り呼ぶ』

家族の様こそ描かれたれ。
戸口に近づきて軽く叩けば、
妻は戸を開けて見るより早く
罵り叫ぶ
『馬鹿、たわけ、耻晒し！
詐偽者よ悪魔よ、
汝はまたも酔ひたるか。』
かくして家内の戦闘は開かれぬ。
夫は髻、妻の手は夫の鬚に攫み付き、

拳闘は續き、子女は泣く。

修羅の巷の騒ぎの中に

この老いぼれ馬と夫は喚き、

穢多、泥棒、妾をよくもと……妻は叫び、

二人は聲を涸らし、口角くさきより泡を飛ばし、

憎念悪意に面相を變へて

隅より隅へと野田打ち廻り、

互に不幸をかこつなり。

.....

.....

遂に疲れて座に着きたれど、

妻は久しく泣いじやくりて、

夫の小腹には痛み残り。

かくて就蓐の時は來て、

神よ、御身の手にて愛兒を固め給へと、

例によりて祈禱をそらんず。

間もなく深き夢は、

軍士と古戰場とを包み了へぬ。

あひゞき

遠き星は微かに光り、
地はほの暗くして、
待ち侘びたる逢曳きに、
わが戀人は來りたり。
燃ゆる情に堪へず、

われは戀人を迎へて、
その美はしき聲音こゝろの囁きに
恍惚として心たゆたふ。
胸は躍り氣は臆し、頭を垂れてわれは立ちぬ。
わが美神の口よりは、
次ぎの間ひこそ聞えけれ。
妾は御身が妾の美貌にあこがるゝを知る、
御身が受くる月俵は
幾何なるか妾に告げよ、わが愛人よ。

鹿獵人 (鹿獵人に與ふ)

山の峽はた谷間へと
彼は鹿獵りに趣きたり。
鋭き眼して
到る處に獸の跡を追ひ、
あらゆる小徑を歩き行けども、

一の獲物もなく、
彼は且つ腹立ち且つ己れを罵りて
わが家に歸り來たれり。
友よ、汝の怒るは愚なり、
見よ、汝が額にはみごとの角あり
汝が獵を始めし日より、
親しき近き汝の友は
これを汝に贈りたり。

十二時は打ちぬ

十二時は打ちぬ、
大空高く明星輝きて燃ゆるが如く、
スウェトラン街頭に事變を知らする聲聞こゆ。
されど可憐なる市民よ、
汝は何程叫ぶとも
警官の耳に入るべくもあらず、

彼は今寝れるなり。

空しく聲を痛むるを止めて
夜間の賊に毛衣を與へよ。

汝は明日店に行きて
別に新らしき衣を購へ。
十二時は打ちぬ、
大天空く明星は輝きて燃ゆるが如し。

春の歌

『歌神よさても歌神よ』

(テレテイヤコウスキイ作)

麗らかなる季節は來ぬ。
何故に、春の歌はなきや。
歌神汝は何處に行きし、
答へずや歌神、答へよ歌神！

起きよ、翼を鳴らし、
古琴を鳴らし、
音高く吾等が前にて
春の歌を奏かなでよ。

月下の世は花咲き、
空には香る肥料の臭ひ、
否な：：露と滴る花薔薇は
香氣馥郁として、

静かなる林には
鳥囀る。

(われ等は濃霧の中に
多くの日を送り、

われ等の間に結ぶ實は
不幸の果實のみなれども)

大空の春の太陽は

時々雲間に光り輝き、

草叢の中には友もなき

餓ゑた鴉飛び迷ふ。

衛生員は戸毎を検べて、

重罪に問はれし住民は

是非を言ふひまなく

判官の手に渡たさる。

清潔を好む一部の民は

邸内の塵埃を車道に捨つ。

永き束縛を脱けて

強き波濤は廣き大洋に
自由に遊び、

大洋と入江の耀ける鏡の面の

かしここゝには支那船浮び、

獨逸船走る。

肥料官吏と滿洲投機師の

怖るべき群は隊をなして來るなり。

勿論相思相戀の人も來る。

來るになんの不思議もなし。

彼等は互に携へて

瘦せたる林に逍遙ひ

身輕き小鳥の如くに飛び廻り、

戀を囁き、

無智に驕り、

互にまたは自ら詐るなり。

南風吹き渡り

細雨しめやかに注ぐとも、

(彼等は感冒を恐れず
 鼻風邪をも事とせず)
 沼の蛙の悪聲も
 戀に浮かるゝ青春には
 甘き言葉のごとく可憐に聞ゆ。
 薬店の價上げはこの時にて
 浮かれ女浮かれ男は「京^{シキヤ}聖^{キヤク}偈」かゝへて馳せ廻る。
 春は總じて吾々に
 多くの善事をもたらすなり。

『コレラ』示威運動を試みて
 續きて『ペスト』は來るなり)

往時のわれ

アルカデイヤの總督となり、
 プルメズ州に奉職し、
 収入多き地位に居て

資産を多く貯へぬ。

斯くも善き土地、好き自然をば
友よ汝は何處にも尋ね得ざらん。
年半ばは霧に包まれ、
濕氣を縫うて人は行くなり。

彼地は總べての善事に富みて
猩紅熱とデフテリア流行し、

突然汝を捕へては

墓場へ移住を命ずるなり。

われは怠慢遊惰にして
其日々々を暮せしが
高位高官を贏ち得たり。

(吾が骨肉は總て

無能のわれを憐み、

全力を舉げてわれを推しぬ。)

些かの遠慮もなく
吾は十萬金を私す、
金力には向ふ敵もなく
吾れを訴ふる人もなし。

治外法權を笠に着、
騎士の血によつて
百頭馬車にも乗るが如き
出張手當を貪りぬ。

過ぐる頃期は満ちて
都府に住居を移し、
仕立師と洗濯屋に
ありし借錢を正しく拂へり。

往時のわれ
アルカデイヤの總督となり、
ブルメズ州に奉職し、
収入多き地位に居て

多くの資産を貯へたり。

現代の主意

(ドブロリュポフに摸似て)

親しき友よわれは亡びん、
われは詐り多き者なればなり、
吾れに謀られぬ人とはなし。

親しき友よわれは亡びん、
されどわが心は平靜なり、
人の金銭な吾は餘す所なく持行けばなり。

吾はヤクークに乘行かん、
されどわれはわが運命に安んず、
又汝に諭す、汝もこの徑路を辿れかし。

歌女

御身が室の窓下にて歌ふを止めよ乙女子よ。
 われは隣家に住まひつゝ
 耳を休めむ時ぞなき。
 たとひ打擲は忍ぶとも
 御身が歌は聞き飽きたり。
 親しき友よ歌ふを止めよ、
 御身は隣人の耳を惱ます。

見よ

見よ大なる街に沿うて
 勇ましく疾く三頭車走り、
 若き軍神これを御せり。
 彼れと並びて車内には

壯麗華美の夫人坐す、
斯くまで飾りたる姿を
汝はこの世にて稀れに見るべし。

鈴は高らかに鳴り響き
馬具は白金の如く光り耀きて
渦巻く塵埃を残しつつ、
馬車は心地好氣に疾く走る。

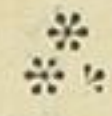
この麗はしき車、馬具、
輝やくばかりの三頭の馬、
夫人の身の装ひ、
すべては數千金の價なり。

見
されど、問ふ、

この夫人とこの馬の主は誰人ぞ。
彼はこの地の砲臺の
主計主任と知られたり。

空しき喜悅

喜悅を期待せしむる
汝が清らかなる美貌、
汝が麗はしき口は
愛の楽しさを囁く。



屢々空想の手に弄ばれ、
驚くべき美貌に欺かれて
愚かなる者は汝の前に跪づく、
汝は彼を偽り欺きたり。



迷ひの雲晴れて
我れに歸りし時、
彼は美貌の言はん方なく卑しきを悟り
汝に會ひしを呪ふなり。

運命の虚偽者に對して
不審不解の念沸き、
この偽りに満てる悪形に
何故に天の面影の宿れるかを疑ふ。

幾何ぞや

—

ア、幸運兒！
彼は巨萬の富を有す。
最とも答へ易き事を汝に問ふを許せ
幸運の紳商よ。
それ、汝が不正を働かしは幾度ぞや。
笑ひに紛らして家を亡ぼされ
汝の爲め悲運に泣くものはそれ幾何ぞ。
財囊を肥やさんと

一心に公民の財源を絞りて
汝が賊せし人の數はそれ幾何ぞや。
その巨萬の財を致すまで、愛嬌面に
神を欺いて祈りをも捧げし事それ幾何ぞ。

二

汗も流さずたい笑うて
高位に昇りし汝！
自白せよ、その原因は何處にある、
汝の今日あるは何の爲めぞ。

權威ある老巧者も辟易して汝を避く、
勿論汝は冷々然と衆を蹴つて昇りぬ。
狂へるが如く競馬に酔ひて勝を争ひし事幾何ぞ。
屈める人の背に蹄を立て、飛び行きし事幾何ぞ。
巨大の賭金を掻き集め
汝は之れを皆隠蔽す。
汝が貪慾に倒れて
役人は死に瀕せり。
汝がその行く道を開き

権利を私するに到りしまでに
懐劔の閃らめきしはそれ幾度ぞ。
淫事の爲め活劇を演せしはそも幾何ぞ。

三

ペトル、イワノウ井チの胸は
處狭しと勳章に飾らる。
されど、彼は一度も戦場に立たず。

(こは内密ぞ)

たゞ己が妻との戦ひに負けて

敗走せし事は數知れず。
公共事業に功績もなく、
彼の恩澤に浴する人もなし。
賣女の心を得るに巧みにして
其手に接吻せし事それ幾何ぞ。
際限なく身邊に撤きたる黄金の高は幾何ぞ。

四

支那を横ぎる鐵道を設け、
多くの幸福を人に施し、

未開の土地を拓きたる
其功蹟は最も高く争ふべからず、
世界全土に故國の名を照らし、

.....

五

殖民地開拓の始めより
異人種がわれ等に盡せし力は多し、
されど何時其勞を認めこれを賞せしぞ。

勞苦と事業とに拂ふべき五錢をも惜み、
わが住民が彼等の背を殴ち其面を打ちし其暴行はそれ幾何ぞ。

この暴行に對して
彼れ其責に任せず、

強きものこそ正義とは
これ古代よりの習慣なり。

異人種が堪へ忍びし
無殘の歎きはそれ幾何ぞ。
斯る待遇に堪へず、

好き地方へと移りたる異人種の数はそれ幾何ぞ。

六

針小棒大は記者の特質にして

吾々がよく知る處なり。

些細の事に花を咲かせて

彼が起せし騒動はそれ幾何ぞ。

同業者との交りを離れ、

善と悪とを取違へて、

ペン先にて強奪者の奴となり、

其極悪を忘れ、

名分と大義とを失ひ、

虚偽を美化する事すら敢てするなり。

些事 (嗚)

何故に汝は空しく鬱ぎ、

何故にしかく憂ひ悲しむや。

妾はいたく汝を愛す、
死ぬまで變らじ、此愛は。

愛人をかたく胸に抱き、
女は懐しげに囁きぬ、
されど男は其身を離して
言葉静に『待てしばし』

霞にはあらず、眼は涙に満てり。

『止めよ、變らぬ愛を注ぐと言ふを、
汝は幾度この事を口にせしや、
答へよ。』

同じからずや

高樓に酒を置くも
繩暖簾に酔ひ潰るゝも

其行爲は同じからずや。
 天鷲絨の椅子に埋まるも
 汚き乾草場に横はるも
 其行爲は同じからずや。
 無智にして學なきも
 學者面して馬鹿なるも
 其行爲は同じからずや。
 小腰を屈めて愚痴を言ふも
 威丈高に讒言吐くも

其行爲は同じからず
 系圖正しき貴人の娘を娶るも
 田舎娘に連添ふも
 其行爲は同じからずや。
 もし汝力弱くば
 汝は必ず敗者たらん。
 憐み、情を願ふは愚かなり。
 慰安の來ざるは同じからずや。
 深夜捧を肩にして

深林に立つも
大都に公然強奪をなすも
其行爲は同じからずや。
其行爲は同じからずや。

パリスの裁き

誰が容色が最も勝れたると

三女は互に争ひぬ。

この争ひを裁くべき

パリスは其處に在らざりき。

厨婢のワシリサを呼ばんか、

はた御者を呼ばんかと、

彼等は互に語らひぬ。

彼等に天賦の美なし

運命如何に定まるべきかと

彼等は安き心もなかりき。

遂にイワンを呼ぶに決し、
イクンを招きて林檎を渡しぬ。
虚偽なく偏頗なく
イワンは真を言ふべき身なり。
パリスの裁きは永からず、
彼は一言も口にせずして
厨婢のワシリサに
争ひの林檎を渡しぬ。
イワンの不禮の行ひを

新年

彼等は深く憤りて
三日に亘る門前の掃除を
御者のイワンに命じたり。

われ等は再び無限の界に立てり、
われ等の眼はこの界を見ず、
されどわれ等の心は

新たなる時がわれ等の爲めに、そを持ち來たすを感じるなり。
 われ等は知らず、されど運命の定めは免るべからず。
 古人が經たる幾多の過去の歴史を將來新らたにわれ等は辿らん。
 古人の偉大なる事業の跡をわれ等は皆教訓となさん。
 天才の偉業と大智識のわれ等に與へし所を心に記さん。
 これ等は天の明星となり世々に永く輝き渡らん。
 隣人の苦痛に對する愛と赤誠の感情の教はわが胸に生きん。
 藝術の作はわれ等の心を波立たせ
 善美不朽の眞理の影をわれ等は將來見るを得べし。

彼が地上の行路を照らすに任さん。
 人生を無事に過ごし、力強い脚にて聖なる殿堂に入らん爲めに
 また人生の言ひ難き能力を感じてわれ等は地上の渾沌たる濃霧に化
 せず、
 心は高き天の調和に向ひ、
 われ等が地上に人たりし事を感じん爲めに。

跋

餘白があつたからちよつと書いて置く。自分は雪國に生ひ立つたためか
外國文學のうちではわけてもロシヤの文學が好きである。太田覺眠氏が
この詩集の翻譯を出されるに就いて、出版の世話をせよと言はれるので
喜んでその編輯兼發行人の名まで犯した。しかしロシヤの文學は好きで
あるがロシヤ語と言ふ物についてはまるで明き盲である。校正の際に譯
文に多少の筆を加へて見たのは、日本人が日本文に斧鑿を加へたと云ふ
事以外に何等の意味もない。それが爲に原文の意味を傳へ残したり傳へ
誤つたりした點もいくらかあるかも知れない。これは譯者柳瀨氏及びこ
の集の讀者にお詫びせねばならぬ點である。

明治四十三年八月六日校正終りし時

中村星湖

明治四十三年八月十五日印刷
明治四十三年八月十八日發行

(非賣品)

編輯兼
發行人

中村將爲

東京牛込區辨天町七十九番地

印刷者

市川七作

東京小石川區久堅町百八番地

印刷所

博文館印刷所

東京小石川區久堅町百八番地



